

# ルイジアナにおける奴隷所有(1850~1860年)

—Vanderbilt 学派の見解に関して—

本 田 創 造

## I

本誌前号所収の、アメリカにおける Ante-bellum South の農業に関する調査研究において、私は、いわゆる Vanderbilt 学派の学問的立場について、若干触れるところがあった。そのとき、私は、次のような、やや大ざっぱな表現によって、かれらの史学史上の評価を行ったのである。すなわち、Frank Lawrence Owsley, Herbert Weaver その他の、いわゆる Vanderbilt 学派の功績の多くは、どちらかといえば、かれらが、多大の労力を払って、未刊の Federal census returns, county taxlists などを手がかりに sampling method という新しい方法によって作成した数多くの調査結果や、また、これを基礎にして、かれらが、かれら流の分析を通じて導きだした結論——いくつかの propositions にあるのではなく、むしろ、従来ともすれば陥りがちであった、きわめて単純化された南部社会の構成図——planters, slaves, poor whites——を痛烈に批判することによって、この点の理解と関心を広く学界に喚起することになった実際的効果のなかにあったように思われる<sup>1)</sup>——と。

これは、しかし、いささか、乱暴すぎる表現であったかもしれない。というのは、かれらの学問的所産に対して、私が全く価値を見出していないと受けとられる可能性が十分にあるからである。かれらが本来的に内包していたであろう(と私が推測する)ところの、すぐれて南部派的な学問的志向——Thomas J. Pressly は南北戦争にたいする諸学派の分類において Owsley を “New Vindication of the South” のなかでも最右翼にたつものと認めている<sup>2)</sup>——の故に、Vanderbilt 学派の分析方法一般には、きわめて共通的な「南部派的」歪みが感じられることは否定すべくもないが、しかし、かれらが抽出した個々の調査結果——findings それ自体は、当時の南部のプランテーション制度、社会機構との相関関係

から切り離して、それを独立的=封鎖的なものとしてみた場合、批判の余地は残されているにしても、多くの学問的素材——資料的価値を提供している。だが、いうまでもないことながら、このようなかたちにおいて単なる素材——資料提供を行うことが、かれらの目的であったはずはない。かれらは、かれら自ら好んで用いた sample もしくは sampling method という言葉に端的にしめされているように、かれらが、直接、調査対象とした郡 county (ルイジアナの場合は parish) 単位の数量的考察を基礎に、それを全州的な規模、さらには全南部的な規模にまで敷衍拡大することによって旧来の伝統的な南部史解釈とは異った、すぐれて南部派的な視野にたった Ante-bellum South の社会・経済的見取図を描きだそうとつとめたのである。そして、事実、かれらは、種々の労作(前掲拙稿、脚注9参照)を通して、それを実現し具体化した。かくて、かれらは、南部史研究におけるひとつの学問的立場を確立したばかりでなく、この研究分野における1大勢力になった。しかし、こんにちまでのところ、Vanderbilt 学派にたいする全面的な批判は、わが国ではもちろん、アメリカにおいてさえ殆んどなされていないのが現状である。それには、それなりの理由があったのであろう。しかし、かれらを完全に無視して、す通りしてしまうことは、この分野の研究の発展のために、決して正しい態度とは思われない。

このような意味において、かつて、Fabian Linden が、かれらにたいして行った実証的ならびに方法論的批判<sup>3)</sup>を知ることは、すでにそれが書かれてから、かなりの時を経過している——したがって、それなりの歴史的制約がある——とはいえ、こんごの Vanderbilt 学派批判ひいては南部史研究にとって、きわめて有益である。というのは、この Linden の批判じたいが、*Science & Society* 誌上で、最近の南部史関係文献を論評した Eugene D. Genovese によって、次のようにいわれているからであ

1) 拙稿「アンテ・ベラムのアメリカ南部農業の特質」『経済研究』第11巻第4号、408頁参照。

2) Thomas J. Pressly, *Americans Interpret their Civil War*, p. 246~248.

3) Fabian Linden, “Economic Democracy in the Slave South: An Appraisal of Some Recent Views”, *Journal of Negro History*, XXXI (Jan., 1946), pp. 140~89.

る。すなわち、Lindenのこの論文は、それがVanderbilt学派にたいする「徹底的かつ明解な批判であるにもかかわらず、南部史研究の専門家たちにさえ、無視されてきたのは不思議なことである<sup>4)</sup>」と。

*Journal of Negro History*に掲載されたLindenのこの労作が直接に批判の対象としてとりあげたVanderbilt学派の諸論文は、次のものであった<sup>5)</sup>。

i) Frank L. and Harriet C. Owsley, "The Economic Basis of Society in the Late Ante-Bellum South", *Journal of Southern History*, VI(1940).

ii) Harry L. Coles, Jr., "Some Notes on Slave-ownership and Landownership in Louisiana, 1850~1860," *Ibid.*, IX(1943)

iii) Herbert Weaver, *The Agricultural Population of Mississippi, 1850~1860*, (Ph. D. dissertation, Vanderbilt Univ., 1941)

紙数のきわめて限られた本稿においては、Lindenのこの論文さえ、十分に紹介することはできない。いわんや、私が、たとえLindenに導かれながらも——というのは、私自身、基本的にLindenの批判のなかに正当性をみだしている——資料的にも、より複雑かつ豊富になった現在の研究史的水準において、私自身の立場からVanderbilt学派の全面的批判を行うことなど、とうてい不可能である。けっきょく、Lindenの論文の一部をてがかりに、前掲拙稿において、私が提示したAnte-bellum Southの奴隷制把握に関する私なりの視点を補足するとともに、Vanderbit学派批判のいとぐちを提供できればと考えるだけである。

いま、私は、Lindenの論文の一部をてがかりに、と書いたが、それは次のような意味においてであった。すなわち、本稿で、私が対象としてとりあげることができたのは、表題にもしめされているように、1850年代のルイジアナにおける奴隷所有に関する問題だけである。

Lindenは、上記のOwsely, Coles, Weaverのそれぞれアラバマ、ルイジアナ、ミシシッピーを対象とした諸論文を検討することによって、かれら3者が共通的に主張している諸見解を次のように要約した。すなわち、かれらの主張によれば、これらの諸州——アラバマ、ルイ

ジアナ、ミシシッピー——においては

i) middle classもしくはyeomanryが、きわめて広汎に存在していたこと。

ii) 土地所有ならびに奴隷所有は広く各層に分布し、それらのいわゆる集中化傾向はみられない。

iii) 多くの農民、とりわけ奴隷をもたない農民——non-slaveholdersは、上昇転化して、奴隷所有者——slaveholdersになりえたこと。

iv) 小土地所有者の土地も、大プランテーション所有者の土地も、質的にそれほど優劣はないこと。

v) 1850年代には、経済水準は一般に順調な発展をとげ、とくに低所得者層がこの恩恵に浴したこと。

vi) 小農民は十分に“comfortable”な生活水準を享受できたこと。

これは、まさしく、Vanderbilt学派のpropositionsそのものである。Lindenの論文は、これらの点をひとつひとつ吟味することによって、全面的にVanderbilt学派にたいする批判を行ったのである。しかし本稿でとりあげる問題は、以上のうちのただひとつのこと、すなわち、第2点の、それも奴隷所有slaveownershipに関する問題だけをルイジアナに例をとって考察することだけである。問題をそれだけに限定し土地所有landownershipの問題をも除外したのは、ひとつには紙数の制限によるものではあるが、そればかりではなく、これ——奴隷所有の問題——が、Ante-bellum Southの経済的階級構成を分析する場合のもっとも重要な視角であると考えるからである。土地所有も重要であること勿論であるが、そこには土地の質的相違——Vanderbilt学派はこれを否定してはいるが——、そこで栽培される生産物の種類、市場との関係その他の要素を考慮せねばならず、単にエーカー数だけをもって階層基準をしめす経済的尺度とするわけにはいかない。これに反して、奴隷所有は、それじたい、かなりの程度までそのような経済的尺度たりうるからである。すなわち多くの研究は、一般的に、奴隷は大プランテーションでも、中・小プランテーションでも、労働力的視点からみて、性・年齢別割合において等質化する傾向をもっていたことをしめしている。

## II

Colesは、その分析を進めるにあたって、当時のルイジアナにおける49 parishesのうち、地理的配置、農業生産物、土壌の型、人口——白人人口にたいする奴隷人口の割合をふくむ——などにより、11 parishesを抽出し、それをさらに5の地域に分類する。すなわち第1は——Ascension, West Feliciana, Iberville, Plaquemi-

4) Eugene D. Genovese, "Economic History of the Slave South", *Science & Society*, XXIV, No. 1, (Winter, 1960) p. 56.

5) Owsleyの*Plain Folk of the Old South*が出版されたのは1949年のことで、したがって、Lindenがこの論文を書いた時は、まだでていなかった。

nes—の砂糖地域であるいわゆる Sugar Bowl。第2は—Tensas, Catahoula—の沖積土の北部棉作地域。第3は—Livingston, Washington—の木材・放牧・自給自足農業の東部 prairie 地域。第4は—Sabine, Calcasieu—の放牧・自給自足農業の西部 prairie ならびに piney woods 地域。第5は—Claiborne—の多角農業の北部 oak uplands 地域。そして、各地域を、それぞれ、Ascension, Tensas, Washington, Calcasieu, Claiborne の各 parish に代表せしめて、そこにおける奴隷所有者を規模別に分類し、これをパーセンテージでしめすことによって、つぎのように主張する。すなわち、大奴隷所有者がもっとも大きい比率をしめていたのは Tensas で、そこでは奴隷所有者の 58 パーセントが 50 人以上の奴隷の所有者である。しかしながら、その地の parishes はこれとは反対の傾向をしめし、Tensas について大奴隷所有者が多い Ascension においても、奴隷所有者の半分が 10 人に満たぬ奴隷の所有者であった。そして、これら棉作地域、砂糖地域以外にあっては、50 人以上の奴隷の所有者が 1 パーセントをしめる parishes はみあたらない。かくて、ミシシッピ河の沖積土地域以外のところでは、奴隷所有者の 3 分の 2 が 10 人に満たぬ奴隷の所有者であった。すなわち、奴隷は、奴隷所有者たちのあいだに広く分布し、その規模は概して“moderate”であった——と。

だが、この場合、問題になるのは、かりに Coles が言うように、奴隷所有者の「多く」が“moderate”な規模のものであったとしても、はたして、かれらはそれらの地域の全奴隷のうち、どれだけ「多く」の部分の自己の所有とすることができたのであろうか。また、これを裏返していえば、「多く」の“moderate”な規模の所有者ではない「少い」大奴隷所有者は、はたして全奴隷のうちの比較的「少い」部分だけを自己の所有としていたのであろうか。この点に関して、Coles は——意識的にか

——なんらふれるところがない。当然に、Linden の批判の一部は、この点に向けられる。

つぎに掲げた第 1 表は<sup>6)</sup>、Linden が Coles の対象としたルイジアナのさきの 5 地域(11 parishes をふくむ)について、Coles の数字を検討しながら、1860 年の census を基礎に、たんに奴隷所有者の規模別分類のみならず、それぞれの規模の所有者層が全奴隷のうち、どれだけの部分を自己の所有としていたかを併せしめたものである。

この場合、Coles の数字と Linden の数字では若干の相違があるようであるが、それを、ここで、いちいち検討することは技術的に困難である。というのは、第 1 に Coles の場合はそれぞれ各 parish についての個別的な数字であり、Linden の場合はそれを各地域にならしたうえでの数字でしめされている。第 2 に、Coles が農業に従事する奴隷所有者を対象としているのに、Linden は奴隷所有者全部を扱っているからである。いずれにしても、当面の問題が、たんに Ante-bellum South において、かなりの数の中・小の奴隷所有者が存在したことそれ自体をしめすことにあるのではなく——それだけならば、必ずしも未刊の census reports を基礎にした Coles などのきわめて複雑な数量的処理をまたずとも、公刊された census によってもかなりの程度まで確認できる——むしろ、それがそれらの地域の全奴隷にたいしてもつ関係をみようとするのであるから、この点を Linden の表によってたしかめてみなければならない。

みられるように、北部の棉作地域においては、全奴隷所有者の 6.5 パーセントが 100 人以上の奴隷の所有者である。ところが、この 6.5 パーセントが全奴隷の 32 パーセントを自己の手におさめているのである。反対に、奴隷所有者の約 55 パーセントが全奴隷の 10 パーセント少しを所有しているにすぎない。しかも——この表にはしめされていないが——この地域の人口の半分以上が奴隷

第 1 表 ルイジアナの各地域における奴隷の分布(1860 年)

	Sugar Bowl		N. Cotton Region		E. Prairie		W. Prairie		N. Oak Upland	
	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)	(A)	(B)
1~4.....	37.5	3.0	25.7	2.0	47.6	12.7	49.5	13.7	39.3	8.4
5~9.....	22.0	5.5	17.7	3.7	28.7	24.8	26.0	22.7	24.8	17.0
10~19.....	15.4	7.7	11.4	4.9	16.8	27.9	17.0	31.4	22.1	29.6
20~49.....	9.6	10.8	22.9	22.8	5.8	22.3	6.5	24.0	12.7	37.7
50~99.....	8.4	22.1	15.8	35.0	0.8	7.4	1.0	8.2	1.1	7.3
100~199.....	5.6	30.0	5.9	27.0	0.3	4.9	.....	.....	.....	.....
200~499.....	1.3	14.5	0.6	4.6	.....	.....	.....	.....	.....	.....
500 以上.....	0.2	6.4	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....

(A).....奴隷所有者の規模別分類(%) (B).....全奴隷の規模別分類(%)

6) F. Linden, *op. cit.*, p. 150

を所有していない。

砂糖地域においては、この傾向はいっそう顕著である。すなわち、この地域においては、非奴隷所有者は白人人口の大部分をしめ、わずかの奴隷所有者のうちの5分の3が全奴隷の8.5パーセントを所有したにすぎない。他方、100人以上の奴隷の所有者であるわずか7パーセントが全奴隷の、じつに半分をその手におさめていたのである。

棉花・砂糖地域以外の non-staple 地域においては、以上の傾向は、ある程度緩和されている。すなわち、東部ならびに西部の prairie 地域では、事情はだいたい類似しており、ここでは奴隷所有者の4分の3が9人以下の奴隷の所有者であったが、かれらが所有した奴隷は全奴隷の3分の1を上廻る程度だった。これらの地域においては、10人以上49人以下の奴隷の所有者である、いわゆる中位の奴隷所有者が全奴隷の半分以上を所有していたが、しかし、それは奴隷所有者の4分の1以下であった。Oak uplands 地域は、以上みてきたところとは若干異った傾向をしめしている。ここでは、白人人口の多く——53パーセント——が奴隷所有者であった。しかし、大多数の奴隷所有者は小規模で、奴隷所有者の3分の2が9人以下の奴隷を所有し、全奴隷の4分の1を自己の手におさめていた。

かくて、Linden のこの表にしめされたところからみれば、そこにみられる特長は、一言でいえば、大奴隷所有者による奴隷の集中化傾向である。すなわち、Oak

uplands 地域を別にすれば、以上の諸地域において大多数の人々は奴隷を所有していないか、さもなければ全奴隷にたいして、ごくわずかのわけ前にしかあずからぬきわめて小規模の奴隷所有者であった。これとは反対に、奴隷所有者の小部分をなす大プランターが、全奴隷のうちのきわめて多くをその手におさめていたということである。

第2表 staple 生産地域と non-staple 生産地域の奴隷数 (1860年)

staple 生産地域	non-staple 生産地域
1. Ascension.....7,376	3. Livingston .....1,690
1. W. Feliciana .....9,571	3. Washington.....1,311
1. Iberville.....10,680	4. Calcasieu .....1,171
1. Plaquemines .....5,385	4. Sabine .....1,713
2. Tensas .....14,592	5. Claiborne.....7,848
2. Catahoula .....6,113	
計.....53,717	計.....13,733

そして、さらに、ここに掲げた第2表<sup>7)</sup>がしめす通り、以上の5地域の奴隷人口の5分の4が棉花・砂糖の staple 生産地域である第1・第2地域に集中していること、また、これらの地域がきわめて生産性に富み多くの耕地をもっていたことを考慮に入れると、いまもみた大奴隷所有者による奴隷の集中化傾向はきわめて著しく、また、Ante-bellum South におけるかれらの経済的地位の優越性はかなり明瞭に理解できるように思われる。

7) Eighth Censue of the U. S., 1860, *Population*, p. 194